

| | |
|-----|---------------------|
| 委員名 | 梅田 唐之助 |
| | 昭和11年原産支流四季用 |
| | 町、村、屋敷等上 |
| | 多、少人知、2月3日 |
| | 1月2日=2月8日 |
| | 川水を立ちぬく山中落葉等 |
| | 昔古から5月=5月 |
| | 最近、食事と考へての不思議 |
| | 川の川は、昔は日本に川の川と呼んでいた |
| | 川が少しあるまでは、今は川と呼んでいた |
| | 自然の川、川の川は、川の川=川の川 |
| | 小川=川の川の川 |
| | 生糸=川の川の川 |
| | CP氏の川への2月3日は、立入り禁止 |
| | 11月11月の川は、川の川の川の川 |

| | |
|-----|-------|
| 委員名 | 江種 伸之 |
|-----|-------|

紀の川流域の人間活動が河川環境に与える影響について、主に水質の面から研究を行っています。これまで、大台ヶ原から河口付近までを対象とした一斉調査を4、5回ほど実施し、周辺の土地利用状況によって水質が変化していく様子を検討してきました。また、支流の貴志川および柘榴川では月2回の定期調査を実施しており、果樹園が広く分布する地域を流れる河川の水質についておもしろい結果が得られました。また、機会があればご紹介したいと思います。

委員名

大石 誠一

- ① 岩野川(紀の川)に対する想つは、やはり小さい時より
川遊びなどいろいろな事で川にに対するしさや親しみを感じる事が
出来た様を思ひます。当り前の事ではありますか、川をきれいにする
川をもと大切にねどう事をちゃんと人に説えていくべきでは
無いかと思います。玉條ごめん水辺の学校計画等行政の方でか
手を取らなくてはいけませんが、もっと住民の意見を取り入れて
やること大事だと思っています。
- ② 河川敷きの有効利用につりは、もと自由に出入りができる風
がくつろげるスペースに変わればいい様を思ひます。下流域下流と
結構入り混じるスペース確実化されていると思いますが、中流域上流域と
あまりにも少な過ぎただと思ひます。疑問に思つる事なんですが、下流では
堤防を道路等に利用されてる所が多く見受けられますが、奈良県
側に入るとほとんど無くなるのはなぜかといふところ。
③ 岩野川(紀の川)をきれいにする為の個人的な意見と二枝流より
流れ出している所で、お古どを設置し、工事等を本流に出さない様に
はっきりつけなければ、玉條でも岩野川に流れ出でている下水等の流れの
枝流がある訳ですが、本当に無いまま本流に流すといふ事はありで本流を
汚す事になります、せっかく上流よりきれいな水が来てでも中流域が汚にな
る流域の仕事は失敗だと思います。流量をできれば増やしてもいいみたい
の良い様にすれば自然の作用を手伝って、きれいな川に戻るのではないかと思ひます。

| | |
|--|-------|
| 委員名 | 小川 禾子 |
| 子供の頃より、紀の川の姿を見て大きくなりました。テコボコ道の堤防を友人たちと自転車で走り回り、河原で水遊びをしたりと、そんな記憶がよみがえります。 | |
| しかし、今では川の風景もすっかり変わり、コンクリートの壁とまっすぐな川になりました。 | |
| 私が丹生川のダム建設に反対する理由はどんどん少なくなってゆく子供の頃の風景がここに残っているからです。昔に比べると、道もすいぶん良くなり、きれいな家も建っていますが、川の様子や印象はそれ程変わっていない様に思います。草や木が自然のままに残り、河と共に暮らす人々の生活が見えてくる。私は、そんな玉川峡が大好きです。それを守ってゆきたいと思っています。 | |
| おそらく、ダムが出来たら今流れている清流も無くなることでしょう。国土交通省が言うようにはうまくゆかないだろうと思います。大滝ダムの工事現場を見て驚きました。数年前に通った時とあまりにも違っていました。この前まで存在していた山村の風景が、あとかたも無く削られ、重機が怪獣のように動き回っていました。たぶん工事が終わった後には、何事も無かったのように、大きな湖が出現することだろうと思います。慣れ親しんだ川の風景が、ある日を境にまったく知らない場所にならない様に、玉川を守りたい。 | |
| 私が大好きなこの川の良さを、他の委員の方たちにも見てもらいたいと思っています。 | |
| 以上 | |

小田 章

古来の都市や文明。多くは川の流域で開拓に発展したことは、歴史の物語でころがる。石器時代からも、紀の川を中心にして産業の発展にて「そろづくり」が行われてきた。その意味で紀の川を考えると、むしろ本当の「そろづくり」はあり得ないと思われる。

しかし、人間のエゴが川を汚すのが(3)は大きな問題であり、その結果(3)の意味で川の復讐を受けたのである。

人間の人の暮らしは、生活下では自然との共生を考えなければならない。改めて川の原点と今後真実は、考へて行くべきではないか。

小生の小川の娘、水遊びの湯は近くの川である。川の遊びの中でも川の恐れは、渠(せき)と井戸と身と土と体験して。今、川は空験の川となるが、全国にどれくらいあるか? 人間のパートナーとして川を位置づけ、川の方を考へ直すところは、まさに「3の2」ではないかと思ふ。